
まだ名前のない物語

しん/

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ名前のない物語

【Nコード】

N2203BA

【作者名】

しん／

【あらすじ】

この物語は、平凡な男子高校生である俺の私的な理由に基づいて書かれたものである。俺の身の回りで起きたこと、そしてそのとき俺が思ったことを文字にしたに過ぎない。ただこれだけはわかってほしい。「あいつら、ホントはすげえいいヤツなんだ」って……。

登場人物紹介

*この『登場人物紹介』は、随時更新されるものとする。

俺(れい)

- > 主人公兼作者()。
- > 16歳。高一。
- > 甘い物好き。
- > 中肉中背。
- > あることをきっかけにひい・ふう・みいと出会った。

ひい

- > ハイ・タイ()。
- > 同い年。高一。
- > 可燃物。火気厳禁。
- > 超スレンダー。
- > ふう・みいとは長い付き合いで、姉妹のような関係。

ふう

- > 二重人格()。
- > 二つ下。中二。
- > サングラスをかけるとスイッチが入る。
- > (ある一部をひい・みいと比べると)すごく、おっきいです。
- > ひい・みいとは長い付き合いで、姉妹のような関係。

みい

- > アニヲタ()。
- > 三つ下。中一。

> みんなの妹的な存在。

> ちっこい。小学生かっくらいちっこ可愛い。

> ひい・ふうとは長い付き合いで、姉妹のような関係。

第0話 / 一二三

この物語はフィクションであり、実在する人物・団体とは一切関係

「『ありません』つと。……………ん、こんなモンか」

やつとのことで一段落した執筆作業。

身体を反らせて伸びをするとともに、チラと視線を壁に掛けられた時計に向ける。

1時間だ。秒に換算すると3600秒間、俺は言葉を紡いで解す作業を繰り返していたことになるのか……………。

自らの熱の入りっぷりに呆れつつ、残っていたアイスココア（元ホットココア）を一口。

俺が通うは私立佐久良学園。立地も偏差値も特徴の少ない、一般的な中高一貫校だ。

その敷地内でも秘境に等しい第3カウンセリングルームに、いま俺はいる。

『第3カウンセリングルーム』というのも名前だけで、少し前までは倉庫として活躍していたこの部屋。

ところが、なんとということでしょう。匠の手によって整備された部屋は以下略。

ともあれ、この静かな部屋でのんびりと過ごしたり、執筆したり、あーんなことやこーんなことをしたりするのが俺の日課になっている。

え？ 「もつと具体的に」？

……………。

……………フツ、夕日が眩しいぜ。

とまあ、これだけ聞くと『デキる作家』と考えられないこともない。そうだろう？ そうじゃなくてもそうなんだ。

だが、実際は『長時間に渡ってケータイとにらめっこしてる冴えない男子高校生』でしかない。そこらへんについては追い追い話すとして。

つまるところ、俺ってのは

「残念ね」

「ああ、残念なヤツなんだよな」

確認のため言っておくが、いまのはきつと天の声的なものだ。

もうひとりのボクとかエア友達とか、俺はそっちのほうの『残念』じゃない、決して。

そついや自己紹介がまだだったな。んじゃこの場を借りるか。

『れい』。

ほらそこ、会釈すな。

コレ号令とかじゃないから。俺のあだ名だから。みんなそう呼ぶんだってマジで。

オホン。名前のことはさておき、俺のスリーサイズはというとだな……………。

「ちょ、ちょっと！ ちょっとちょっと！！」

「わあったわあった。あとでひいにも俺のスリーサイズ教えてやるから」

「いやいやいや。あんたなに言ってるの？ そんなことよりあたしが言いたいのは」

「あーはいはい、ワロスワロス」

「れい、あんた人の話聞く気ないでしょ!? さっきだってあたしの第一声を天の声的なものとしてスルーしたわよね!？」

「うるせえな。お前は知らないと思うけどな、世の中には『ガムテープ』という便利アイテムがあつてだな」

「あたしは子供か!？」

「それを使えば人の一人や二人黙らせるくらいなんてことないんだぞ」

「あんたは鬼畜よ!!」

「なんだ。構ってほしいのか？」

「ば、ばばばば、ばばばあ!？」

「俺は男だ。どちらかと言えばじじいだ」

顔、真っ赤。俺じゃなくてコイツが。

本当に一瞬で茹で上がるんだよな。血行がいいのかね。

やっぱりコイツも紹介しなきゃダメ……ですよね。そうですね。

ハイ、こちらが今回紹介いたします、『瞬間湯沸かし器』です。これが2つセットでお値段なんと八千キュッパ あ、これもダメ？

では改めまして。

えー……。このハイテンションでときたまヘンタイちつくになる彼女(略して『ハイ・タイ』。目指せ流行語大賞!)こそ他でもない、我が校が誇る暴走少女『ひ

にいに、会いたかったあ」

「おう妹よ、俺も会いたかった!」

「今日ね今日ね、アニメ トでお買い物なのお。にいにも一緒に来てくれるう?」

「HA HA HA! モチロンさ」

やっべ。今日もみいたんマジ天使!

……と、俺の心のシャウトからもわかるとおり、このおっとりと

した口調のかわゆい娘が天使　もとい『みい』その人だ。

出来ることならいまからでも彼女の魅力を余すところなく語ってやりたいのだが、文字だけではその全てを伝えるにはいろいろと欠けているので割愛。

……何？「他にも知りたいことがある」？

フフフ……。そんな諸君にすばらしい言葉を授けよう。

詳しくはWEBで。

それよりも、さつきからこう……モヤモヤする。まるで、誰かの紹介を途中でほっぽってきたかのような……。

「あああの、お、おじゃまして、ます」

「ぬーおお俺のうしろに立つなあー！」

「ひううう！　「ごごごめんなさあい……」」

「へ！？　あ、いや違うんだ！　これは反射的にといつかなんというかオフのふうとは知らなかったただけなんだだから泣かないで！」

「すん……ぐすん……」

あー、泣かせちゃった……。

……。

……そう簡単に悟りって開けないよね、うん。つか悟ってどうするよ、俺。

とりあえず言い訳をさせてもらうとだね……俺、コイツ

『ふう』『苦手なんだもん！』

始終オドオドしてるし、いまにも泣き出しそうな声で話すし、かと思ったら暴力に訴えるし！

この前なんて、出会い頭に背後からCQCかけられて「動くな、吐け」だぜ。さすがの俺でもリバーズしそうになったね。……いや、あのときはオンのふうだったか。

閑話休題。

とにかく眼前の問題を処理しよう。

……それにしたってこのままじゃ埒が明かない。となれば……

「ひい、出番だあ　と叫ぼうと思ったんですが、何を探しておいでまするか……？」

なんとも日本人として心配されそうな日本語になったが、俺のテンパリ具合が伝われば良し。

「何って……生命の神秘？」

なに言っちゃってんのこのハイ・タイ？

「もつといえはサングラスよ、サングラス」

なにやっちゃってんのこのハイ・タイ！？

「いまずぐそのバッグから手を離して降伏しろ！」

「あ、見つけ」

「ちよつとひいさんそれだけは勘弁！」

我ながら見事な土下座。（行動が）速い、軽い、キレイ。キヤー
れいクスステキー。

「むっふっふ。あたしを無視した拳げ句、放置プレイを強いた罰よ
誰だよコイツにそんな扱いたしたヤツ。

「あ。俺か」

「へいみい、パス」

おおつと。ひい選手からグラサンが放たれたーッ。

「パース。はい、ふうちゃん」

そしてみい選手を経由してふう選手へ。良いパス回しです。

「ふえ……。あ、ありがとう」

「……………おや？」

実況という名の現実逃避を敢行しているうちに、なにやら不穏な
空気が　　つて！？

「待つて待つんだ待とうじゃないか！」

こんなときだが、説明しようッ！　ふうはサングラスをかけると人が変わっちゃう二重人格ちゃんなのだッ！

ちなみに、俺が『オン』と呼んでるほうがグラスンかけた状態ね。

「あつという間にい、ふうちゃん大変身く」

「な、なんだつて!？」

もはやそれは、天使の声での死刑宣告だった。

「むふつ。もう手遅れよ、れい」

「くツ！ ま、まだ何か手が」

「さあ」

あ……………。

この女子高生らしからぬドスの効いた声。そしてそこにいるだけで人を圧殺するかのようなオーラ。

間違えるわけがない。

「貴様の罪を数えろ」

「アッ　　ッ!!」

ふう様キタ

!!

この後、俺がチンピラ正拳突きを食らった（5 HIT!）のは、また別の話。

もし俺の目の前に青いタヌキ型ロボットが現れたら、きっとタイムマシンを借りて昔のふうを調教しに行くとおもいます、まる。

『作家になる』。

そんな思いつきで出たような話が、俺の夢だ。

ぶつちやけ少し前までは、夢なし部活なし彼女なしの3ナイ野郎だった俺の、単なる思いつきにすぎなかった。

だが最近になって、『3ナイ野郎』は『ナイナイ野郎』になった。それもこれも、あの3人に出会えたからこそだろう。

まだあいつらには、言葉にして「ありがとう」を言えていない。

けれどもいずれ言うべきときが来る。

だったらそのときのために、俺はあいつらと過ごした時間を文字にして綴ろう。あとから読んでも笑えるよう、少しばかりコミカルに、小説風にして。

そしてそのときが来たら、「ありがとう」と一緒にそれを贈ろう。

この物語はまだ始まったばかり。

あいつらがヒロインで、俺は主人公兼作者。

これはそんな物語。

第1話 / 一二三

季節は冬。

1日の授業が一通り終わり、陽が紅く染まり始める頃。

今日もお馴染みの顔ぶれが、お馴染みの第3カウンセリングルームに集まっていた。

「人間は抗う生き物なのよ！」

そこでなにやら受け売りめいたことを声高に表明するハイ・タイがいた。というかひいだった。

一方俺はその横で、

「ねえにいに。今日もまた、ね？」

「お、イトだな。じゃ一緒に行くか？」

「うん！」

「わわ私も！ 私も、付いてっついていい……かな？ みいちゃん」

「モーマンタイい。にいにもモーマンタイ？」

「は、ハハハ。モチロンサ……」

天国と地獄の間をさまよっていた。

「じいー……」

するとどういうことか、ひいがこちらを見つめている。仲間に入りたいのだろうか。

「ひい。仲間に入りたいのか？」

「…………… あんた、いい尻してるわね」

「わああ。まさか同い年の女子にそんなこと言われるとは思ってもなかったぜ」

つかコイツ、出だしのセリフを見事に蹴飛ばしていったな。

それとこのアニヲタと二重人格。こっちをチラチラ見ながらのヒソヒソ話は止めていたきたい。

「ま、それはそれとして」

「おいコラ。他人の尻をそれ呼ばわりすな」

「れいってさ、あたしとふうとみいとで接する態度が違う気がするのだけど。気のせいかしら？」
「びくつ。」

「あ。それ、私も思った」

「ぞわあ……………」

「そお？ にいにはいつでも優しいよお」
「ほっこり。」

と、これら3つの擬音語は彼女らのものではない。紛れもない俺の内心を表したものだ。三者三様ならぬ一者三様といったところか。あー、ほっこりほっこり。

「ちょっと聞いているの？ れい」

「ん……………あ、ああ」

ほっこりの余韻にひたっていたら、現実じつじに引き戻されてしまった。俺の至福の時間をジヤマするとはけしからん。抗議しようそうしよう。

「あと5分だk」

「で。そこんとこどうなのよ？」

「どどどどどうなんですか？」

「にいにっ…」

抗議するヒマさえもらえなかった。

にしてもひいのヤツ。なんとも答えにくい質問をしてくれるのな。
「えーと、その……………。なぜにそんな話になる？ そもそもだな、俺は思っわけよ」

「……………」

「こんな話、別にいましてなくてもいい気がなきにしもあらずといつかなんとだろうか……………」

「……………」

「……………」

「「「じいー……………」」」
……俺が、なにをしたっていうんだ……………？
「あーもう！ わあった、話すから……………」
こうなったら腹をくくって、それっぽい話でごまかすしかない！

こうして俺の闘いは始まった。

2分後。

「言い残すことはあるかしら？」

「スンマセンしたあ！」

白旗を上げる俺が、そこにはいた。

「グラサン出されただけで降伏する俺って一体……………」

「なにか言った？」

「ハハツ、なんでもないっスよ！」

くそう。なにがいけなかったんだ？ 話題か？

ツ！ もしや……………！？

「おまえら、ジヨ ヨ 四部派ではなく三部派なんだな！ そうなんだな！？」

パァン。

「……………は？」

突然のことだった。だから俺の反応が遅れたのも、当然といえば当然だ。

銃声が轟いたわけではない。そういうのはアニメやマンガだけで充分だ。

爆竹や痾糞玉などの手の込んだいたずらが施されていたわけでもない。つかあつてたまるか。

拍手。

最も簡潔に言い表すのであれば、それ以外にあるまい。
ひいが鳴り響かせた1つの音。その行為が意図するところとは

「で。そこんどこどうなのよ?」

「どどど、どうなんですか?」

「にいに?」

いままでのやりとりをなかったことにされた。ちくしょうこの数
分で失った俺のなにかを返せ。

「はあ……。わあつた。今度こそちゃんと説明するから 俺から
見たおまえらの印象を」

もう ヨジヨを除けばこれぐらいしかない。これでダメならあと
がない。残すは相手方の反応か。

ひいは……。どこか納得いかないような顔をしているが、とりあえ
ず聞くだけ聞くつもりらしい。

ふうは……。直視したくないが、「聞かせて聞かせて」という気配
を漂わせているようだ。

みいは……。うん、可愛い。

これは、イケる!

「うし。まずはひいからな」

「あたし?」

「おうよ。おまえは……」

……。待てよ俺。

さつきはあんなこと言ってしまったが、俺こういうの別段得意っ
てワケじゃないんだよな……。いや、やるしかないんだよな。とり
あえず整理していこう。

ハイ・タイことひいは、成績がそこそこいい。

「まあ勉強はできるほうだよな。それと、」

中でも保体は群を抜いている。年に一度行われる体力テストなる

ものじゃ、男子の記録にグイグイ食い込んでくるからな。そういうところは普通に尊敬出来る。

「スポーツ少女……ではないか。帰宅部だし」

そう。なにを隠そうコイツこそ、帰宅部のエースちゃん（自称）なのだ。

「あとは……」

……。

……。

「黙っていれば美少女？」

「なんで疑問形なのよ」

自分が騒がしいヤツってのは認めるのか。でもま、コイツ見た目だけはいいもんな。

「ン。ひいについてはこんなモンか。じゃ次はみいか」

「はあい！」

「……」

「ちょ、ひいさん！？ 不満だろうけど無言かつ無表情でグラサン構えないで！ 謝るから進ませてください！」

…… 今更になって、今日生きて帰れるか心配になってきた。

それはそうと、みいの印象か。

「みいはだな」

「うんうん」

後輩ではあるが、

「可愛い妹だ」

「わあい。あとは？」

学年トップの頭脳を持つ、

「超可愛い妹だ」

「わあ。あとは？」

中学生とは思えないほど小さくて、

「ロリ可愛い妹だ」

「あとは？」

少しばかりアニヲタ成分多めの、

「めがっさ可愛い」

「れい。ちよつとだけあたしとお話しましょ」

何故かひいに首ねっこつかまれて部屋の隅に連行された。いまイイとこだったのに……。

「前々から思ってたんだけど、」

ひいは声を抑えてそう切り出した。

「あんたってシスでロリなコンプレックス持ちなの？」

「だとしたらどうする？」

「……………」

「俺が悪かった。だからグラサンを仕舞ってくれ。あとそれは誤解だ」

「誤解？」

「そうとも」

俺がシスコンかつロリコンだつて？んなアホな。

「俺が愛でているのは妹キャラでも幼女でもない。ひいだ」

「は？」

「言うなればヒイコンだ」

「いやいやいや。は？」

「つまり俺はヒイコンであり、シスコンやロリコンにあらず、といったところだ。アングスタン？」

「あなたの思考は理解出来ない、ということを理解したわ」

「…………… あれれー、おかしいなー？」

「ようするにあんたは、『俺のみいがかんなにかあいいのは世よ（よ）の一理わり』って言いたいよね」

「おまえ、実はエスパーだったのか！？」

「ならあんたはパツパラパーね」

「ム。こうみえても家庭科は得意分野でな、」

「あーはいはい、エロスエロス」

「別にいまのセリフはエロくないし、おまえこの前のこと根に持つ

てるだろ！」

「ところであんた。女の子を待たせておいてなんとも思わないの？」

「こんなときに何を言ってる……」

ひいの視線の先を追ってみると、そこには女子中学生が2人
ふうとみいがいた。

この場合、ひいが指す『女の子』というのはおそらく……。

「ふうにもちゃんと言ってやれ』、と？」

「あら。あんたも実はエスパーだったのね」

「そりゃどうも……」

言葉とは裏腹に、いまはパツパラパーからエスパーにランクアップしたことの歡喜よりも、「やはり逃れられない運命なのか」という絶望のほうが大きい。

なにせあのふうが相手じゃ……ねえ？ ……そうだ、深呼吸しよう。

「ひっひっふうー、ひっひっふうー、ひっひっふうー……」

「み、みいちゃん。先輩さんは何をやってるのかな？」

「んとねえ。きつと自分と闘ってるんだよお」

「そうなんだ……」

みいちゃんや。あながち間違ってるじゃないけど、そりゃかつこよすぎ
やしやせんか？ にいに泣けてくるよ？

「ひっひっふうー……。よっしやあ、ふうー！」

「ひゃい！？」

「気合い入れてくぞコノヤロー！！」

「生まれバカヤロー」

ぺちんっ。

「ハッ！？ ひい、俺は一体何を？ つかその手に持ってる鞭のよ
うなもの？」

「愛の鞭よ」

「『愛の』って、おま」

ぺちんっ。

「イタツ！ ……打ったね。お隣りの丸山さんにも打たれたことないのに……」
「ぺちんっ。」
「いッ！」
「ぺちんっ。」
「ちよ、待っ」
「へいへーい」
「ぺちぺちんっ。」

「おまえ楽しんでるだろ!？」

「あ」

「『あ』じゃねえよ!」

「つい……」

「そんな万引き犯の言い訳みたいに言われても許さねえよ!？」

「反省はしてないわ」

「してください!!--」

「ハア、ハア……あー、疲れる。マジで何やってんだろ、俺……?」

「にいに、落ち着いたあ?」

「落ち着く? 俺はいたって冷静」

「そうか。いまやっとわかった。」

ひいはヤケになっていた俺を落ち着かせるために、あんなことを……。

……ホントにどこまでいってもいいヤツだな。

「ひい。1つだけいいか?」

「な、何よ? お礼なら別に……」

「ははっ、赤くなつてら。」

でもこれだけは言っておきたいからな、言わせてもらっぜ。

「あとで校舎裏に來い」

「ケンカ売られた!？」

「さて、最後はふうだったな」

「そして何事もなかったかのように話を進めた!？」

…… ホント、おまえらには感謝してるんだぜ。

つと、いまはふうの番だったな。

「ふうは……」

二重人格つつうとんでもないモン持つてるけど、それでも女子には変わりない。

恥ずかしがり屋で引つ込み思案なただの女の子。なのにコイツは、もう1人の自分が存在することを嘆かないし、否定しようとしなない強いヤツなんだ。

だから俺は、そういうのを全部引つくるめて、

「ふうはすげえヤツだと思う」

お？ 俺にしては結構キレイに決まったぞ。少なくともこれならふうのスイッチが入る可能性は低く……。

「……………」

「なんか反応が薄い……というかないな」

「ふうちゃん、ダイジョブう？」

「……………」

「ひいねえ、ふうちゃんが……」

「あらま。氣い失っちゃってるわね。おーい、ふうやーい」

「……………」

返事がない。だが生きているようだ。

……俺はこんなヤツらに感謝しちゃってるのか……………。

なんとも締まらない話である。

あいつらには言えなかったが、あと1つ、あの3人に共通して言

えることをここで言わせてもらいたい。

血はつながっていないがホントの姉妹のように仲がいいあいつらは、3人揃うと呆れるほど笑いが絶えない。性格も趣味も歳も違うのに。

笑って、怒って、泣いて、また笑って。それがずっと繰り返されるだけなのに、見ていて飽きない。ずっと見ていたい。

でもやっぱり、誰であろうと何があるうと、笑った顔が一番だと俺は思う。

そっか。

俺はあいつらの笑顔がたまらなく大好きなんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2203ba/>

まだ名前のない物語

2012年1月11日23時54分発行